

インターバンクの声（2015年2月13日）

昨夜の欧米市場でのユーロは、ウクライナの停戦合意やギリシャ債務をめぐる交渉に再び希望が戻りつつあるとして、過去3週間どうしても上値が抜けていくレベルではあるものの1.14ドル台に戻して来た。その一方でドル円は、米長期金利が上昇傾向にあったことなどから120円台でドルの底固めに掛るような気配にもなっていたが、ロンドン市場の早朝に「日銀の追加金融緩和は逆効果、消費者マインドにも悪影響」などの報道が日銀関係者の話として伝わったことで118円台まで急降下してしまった。ただ、昨夜はこの日銀関係者の情報が流れていなくとも、米小売売上高が予想以上に落ち込み、雇用関連の指標も悪化したことで、結局はドルが下げるようになっていたはずだ。それでも指標については、新たに堅調な発表でもあれば直ぐに反発もあるはずだが、日銀関係者の情報については暫く市場に後遺症を残すこともあるかも知れない。日銀当局が正式にこの情報を否定してくるのか、全くの無視を決め込むのかが気になるところだ。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。